

# 日本のインフレにおける持続性とコロナショック

鈴木 浩史 CMA・CIIA

## 目 次

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1. 序論               | 4. 推定結果に基づく品目分類     |
| 2. 先行研究および本稿で用いるモデル | 5. コロナショックに反応したインフレ |
| 3. データ              | 6. 結語               |

本稿は日本のCPI（消費者物価指数）の品目について、持続性とコロナショックに関して分類し、CPI全体にどのように影響しているかを分析した。分析により、コロナショックがCPI全体の押し下げに働いたこと、またその影響がインフレにおける持続性によりショックが生じた次の四半期にわたって続いたことが明らかになった。さらに、品目ごとに需給と価格の変化は多様であり、コロナショックが日本のインフレに与えた影響は複雑であることが示された。なお、本稿は本文と補論で構成されており、詳細を補論で述べている部分については本文中に注が付されている。

## 1. 序論

2020年から感染が拡大した新型コロナウイルスによる経済へのショック（以下、コロナショック）には、様々な波及経路が考えられている。Guerrieri *et al.* [2020] は、ロックダウンなどの供給ショックが需要ショックに転じるモデルを示しており、コロナショックが需要ショックか供給ショックを峻別することが難しくなっている可能性がある。物価に与える影響についてはコロナショックが需要ショックか供給ショックかによって大きく異なり、コロナショックによる日本のイン

フレへの影響を明らかにすることは定量的な課題である。

コロナショックがどのように日本のインフレに影響をしたかという問題に対して、特にコロナショック初期にいくつかの研究が発表されている。Watanabe [2020] は、スーパーマーケット販売額および販売価格についてコロナショックによる一時的な増加を報告する一方、エコノミストらの予想を用いてインフレ期待の低下を指摘した。一方、Abe *et al.* [2020] はマスク販売価格を用いることで、コロナショックにより消費者の嗜好が大きくシフトするとともに、パーシェ指数がラス



鈴木 浩史（すずき ひろふみ）

三井住友銀行 市場営業統括部調査グループ エコノミスト。2004年慶應義塾大学経済学部卒業。同年、三井住友銀行入社。2013年一橋大学大学院国際企業戦略研究科修士課程修了。